

若

い頃は、日本にないものに憧れる。アメリカやヨーロッパなど、西欧文明の力は圧倒的に見える。デザインを手がける人々も例外ではない。今回、取材を依頼したインテリアデザイナーの内田繁氏をはじめ、日本のデザインや美術の隆盛を担ってきた戦後派の人々は、一度は必ず西欧文化のシャワーを浴びた経験を持っている。

日本の伝統建築や美術品、茶道や華道などの文化は古臭いものに思われ、アメリカのポップアートのはじけるようなエネルギーや、ヨーロッパの重厚な建築や絵画に惹かれ、熱く語り合った日々。だが年齢を重ねるにつれ、古いものに見えた日本の伝統文化が新鮮で、オリジナリティにあふれていることを知る。海外の友人に指摘され、気づく人もいる。

内田氏もそうだった。さまざまな建築デザインを手がけてきたものの、自分が特に日本を意識したこともなければ、日本文化を深く研究したわけでもな

ウツなる日本の空間 現れる微細なるウツツ

かった80年代に、海外のデザイナーやジャーナリストからたびたび、

「ウチダのデザインするものには、日本的な要素がある」

と指摘され、そのたびに驚いた。当時は「日本なんてクソ食らえ！」と思う気持ちのほうが強かったからである。

「なぜそう言われるのか、自分なりに考えました。きっと僕のデザインには何かを捨てて、捨て切ったところに表れるものがあったのでしょ。そして捨



京都の眼鏡店「POKER FACE」。写真はいつも内田氏の写真。写真：浅川 敏

て切ることとはまさに、日本的な営為だったんです」
自分が意識しないうちに表現されているということとは、骨身にしみこんだ部分からにじみ出てきたものであるはずだ。

日本建築にもさまざまな様式があることは読者もご存じの通りである。日光東照宮のようにデコラティブな建築物もある。だが、海外のデザイナーやジャーナリストが「日本的」と呼ぶ場合、それは茶室に通じるミニマムな要素をさすことが多い。まず無駄が削ぎ落とされた空間があり、そこに掛け軸や花、道具をしつらえることによって、初めて亭主の個性が浮かび上がってくる建築物。内田氏が「日本的」と呼ばれていた頃、同じようにファッション・デザイナーの山本耀司氏や川久保玲氏らが欧米で人気を集め、「日本的」という評価を受けていた。黒を基調とし、仏教の僧衣にも通じるミニマムさは、計

おもてなしの 源流

第5回

サービス経済化が進展するなか、競争優位性の源泉として顧客接点の強化を挙げる日本企業は多い。そこで注目されるのが「おもてなしの心」の発揮だ。日本ならではの心、どんな経緯で成立し、どんな要素で構成されているのか、よく知られているとはいえない。この連載では今もおもてなしの心が息づく現場を歩くことで、「おもてなし」とは何か、企業の競争優位性構築にどう生かせるのかを明らかにしていく。

文 千葉 望 企画編集 五嶋正風 (本誌)

しつらい



内田 繁氏がデザインを手がけた東京・西麻布の「le bain」で。

算したわけでもなくとも欧米人の目には「日本的」に映ったのである。

「捨て切ると結局は本質が出てしまう。おそらくみんな、日本に反発し、欧米をめざしたあげくに戻ってくるものがあるでしょう。文化は、知らないうちに継承されるのだと思います」

その後内田氏に、茶室の設計依頼が寄せられる。実は日本建築を専門とする建築家にとっても、茶室の設計は容易なことではない。茶道をかなり深く学んでおかなければ、庭を含めたさまざまな茶室における決まりごとを理解できないからである。内田氏も最初は断った。

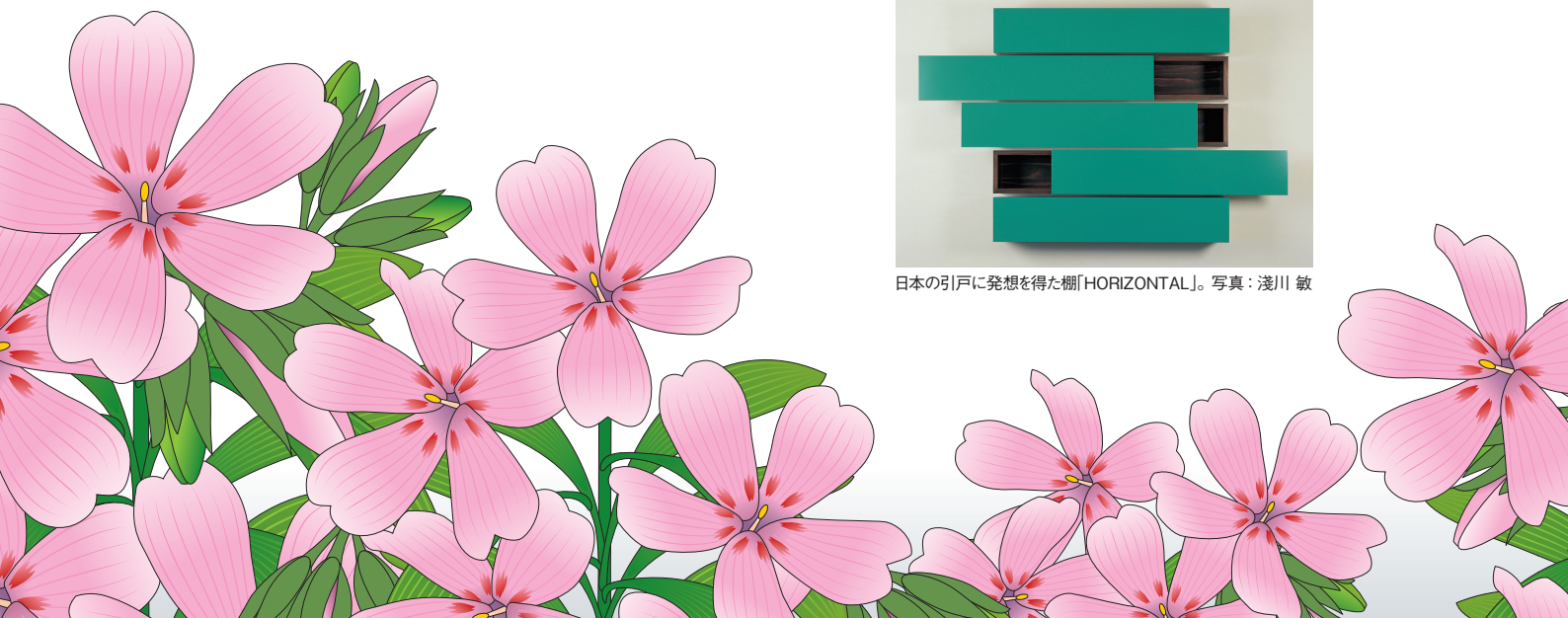
「茶の湯のことは知らないし、怖い」というのが理由だった。だが、最初の施主はこう言った。「内田さんの仕事に茶室の匂いを感じた」。伝統的な決まりごとにとった茶室を作りたいな

ら、京都あたりの専門家に依頼すればよいのである。あえて内田氏に依頼するのだから、茶の湯の本質だけとらえてあれば、斬新でよいのだと思ったのではなかったろうか。その結果生まれた最初の「茶室」は、「茶室」という形の現代版アレンジ」だったと内田氏は振り返る。茶室の本質に迫るには、まだ知識も経験も不足していた。

内田氏は自ら裏千家の茶道を習い、茶事にも出かけるようになった。もちろん、たくさんの文献を読み、名茶室を訪ねた。道具も集めた。学ぶ過程で見えてきた茶道の本質や、日本文化の深み。その後内田氏は、たくさんの茶室をデザインすることになる。そこにある空間に、季節や目的に合わせて選んだ花や道具を取り合わせていく「しつらい」に現れる日本の美学。「しつらい」と、それによって生まれる「日本のもてなし」について、今回は考えてみたい。



日本の引戸に発想を得た棚「HORIZONTAL」。写真：浅川 敏



靴を脱ぎ得られるくつろぎ



うちだ・しげる
インテリアデザイナー
1943年、横浜生まれ。桑
沢デザイン研究所卒業。70
年内田デザイン事務所設
立。商・住空間のデザイン
にとどまらず、家具・工業
デザインから地域開発まで
幅広く活動する。主な作品
は茶室「受庵・想庵・行庵」、
門司港ホテル(北九州市)な
ど。著書は『インテリアと日
本人』(晶文社)など。

読者の自宅に、今和室は何問あるだろうか？
マンション住まいの場合、せいぜい和室は1

室。場合によってはそれすらないかもしれない。気
密性の高いマンションに、畳の部屋は不向きだとい
う考え方も浸透してきた。フロアリングのリビング
にソファやダイニングテーブルを置く。寝室にはベ
ッドを置く。そんな生活が当たり前になっている。

だが、ずっとソファに坐ったままくつろぐ人がど
れだけいるだろうか。ソファに寝転ぶ、あるいはい
つのまにか全員が床に腰を下ろして、ソファは背も
たれと化す。それが無作法ではなく、ある種の日本
のくつろぎの形であることは興味深い。

内田繁氏は、日本文化の特質のひとつとして、明
治以降の二重構造を挙げる。たとえ洋風の家であっ
ても、日本人は玄関で靴を脱いで家上がるし、ソ
ファを下りて床に坐る。かつて日本人にとっては、
家は聖なる空間として、囲われるものであった。聖

なる場所には土足では上がらない。坐る文化そのも
のはアジアに共通して見られるけれども、家を聖な
る空間として靴を脱ぐことは日本独特のものだと見
る。

「明治時代、近代化をめざした政府は旧弊打破を掲
げて、生活様式まで変えようとした。洋館を建
て、椅子とテーブルを置く洋間を取り入れたのもそ
のひとつです。しかし、ずっと椅子に坐る文化は日
本には定着しませんでした。どうしても靴を脱ぎ、
床に坐りたがる。考えてみると椅子やテーブルは飛
鳥時代に中国大陸から入ってきた、歴史のある文化
なのですが。」

僕が裏千家の『淡交会』で講演をしたとき、ある

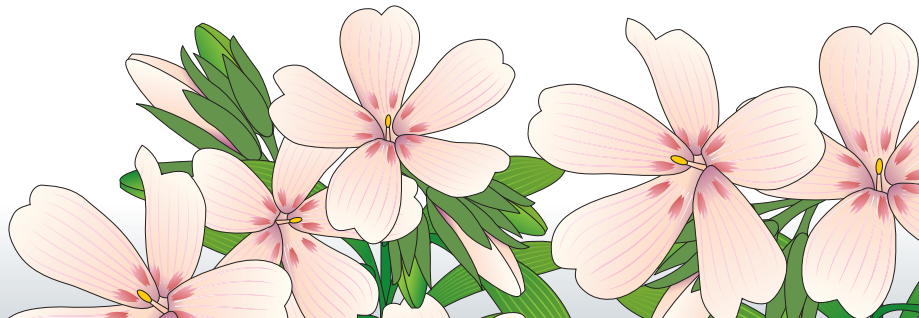
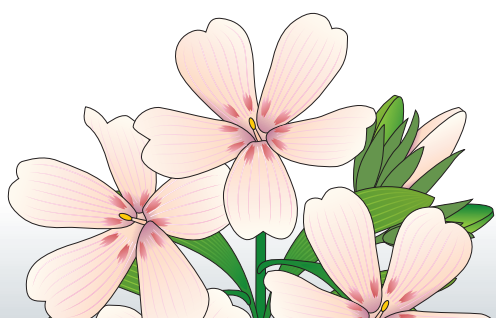


安藤忠雄氏が設計した神戸のビルの一 corner にデザインされた、「YOHJI
YAMAMOTO」のブティック。水平感覚を採り入れた例その1。
写真・Nacása & Partners Inc.

宗匠に『これからの茶の湯はどうなりますか？』と
訊ねられたことがあります。私は『日本人が靴を脱
いでいる限り、変わらないよ』と答えました。たし
かに飛鳥、奈良、平安、鎌倉、室町……時代はさま
ざまに変化したし、そのときどきの外来文化を柔軟
に受け入れてきた日本なのに、履き物を脱ぎ、床に
坐る生活様式だけは決して手放さなかったことは興
味深い点です。これほど科学技術が進歩した現代も、
やっぱり日本人は靴を脱ぐわけです(笑)」

小間の茶室に入るとき、客は寄付で路地草履に履
き替え、蹲踞で手指や口を清める。そして身体がよ
うやく通り抜けられるぐらいの開口で路地草履を脱
ぎ、身体をかがめて茶室に入っていく。そのときに
は自ずと頭を下げる格好になる。茶室の中では足袋
姿となり、畳の上に正座する。やがて亭主が出てく
ると、扇子を前に置いて客との間に結界を作り、挨拶
をする。同様に、客も扇子で結界を定めて挨拶を
返す。

おそらく、茶の湯のことをまったく知らない人
であっても、日本人なら、ほのぐらい茶室に坐って炉





紙メーカー「竹尾」のショールーム「青山見本帖」。水平感覚を採り入れた例その2。
写真：Nacása & Partners Inc.



竜安寺の石庭。水平に広がる日本の美の典型だ。©Macduff Everton/CORBIS

から漂う香をかいたとき、思いがけないほど心の底からくつろぐ自分を発見するだろう。「もともと茶室はなんの家具も置かれていない空っぽの空間です。炬が切られ、床の間があるという基本形だけ。そこは『空Ⅱウツ』なる空間ともいえます。しかし、亭主は空である茶室に、自分の心入れで軸や花を飾り、その日にふさわしい道具を揃えて客を迎えます。そこには空から『現Ⅱウツ』が現れます。室内が空だからこそ、変化が可能だともいえますね。日本には、変化こそ永遠であり、変化しないものは朽ち果てるという考えがあり、日本の空間とは変化による時間を作るためのものとして存在しているのではないのでしょうか。もてなしやしつらいは、時間を作るための手段なのです」

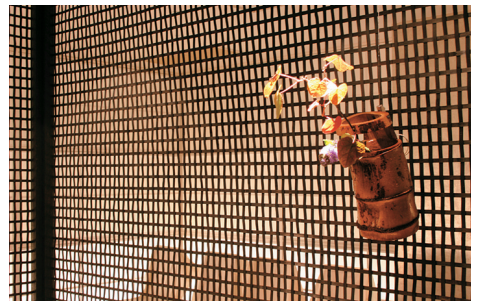
内田氏は、茶室とは「日常」と「超日常」のあわいに存在するものだと考えている。日々の暮らしが「日常」だとすれば、聖なるものと関わる時間は「超日常」。その微妙な中間を、茶の湯は創造していく。もうひとつ特徴的なのは、日本には「認識的な仕切り」が存在することである。先に例を挙げた「結界」はその例であろう。扇子一本で亭主と客を隔てる。あるいは座敷で行われた宴会などで、膳が出されると、それが広い座敷の中の「自分の領域」として認識される。膳と座布団という融通無碍な領域は、宴会が終わって取り払われてしまうと再び空に還るところが、いかにも日本的である。

「軸やお膳、ハレの日の食器などの道具類は現（ウツツ）を表現するものだから、ふだんはしまっておかなくてはいけません。だから、日本のそこそこの家には蔵が必要でした。年に一度しか使われないものもありますからね」

靴を脱いで、自分にとっての聖なる空間（家）に上がり、坐ってくつろぐ。それによって日本人は、深く思考する体勢をとる。もうひとつ、坐ることによって生まれるのは、水平の視点だと内田氏は考えている。垂直ではなく、水平。日本の庭は、座敷から坐って眺めることを前提に設計されている。禅寺の名庭がその典型である。京都の竜安寺にある石庭は、庭に向かって張り出した廊下や座敷に坐ったとき、もっとも美しい広がりを見せる。

「日本の古い建築物は、主な材料として木材が使われます。それが直線的な美の究明につながったのではないのでしょうか。日本的であり、本来的な美である水平感覚は、浮遊感覚にもつながると思うようになります。坐って庭を眺めていると、風や音、光など自然の波動を敏感に感じ取ることができます。静かに坐ることによって得られる感覚とは、そうした微妙に移り変わる変化を楽しむものでした。従っ

おもてなしの 源流



上田家伝来の由緒ある道具をしつらえた「山居」。写真：浅川 敏

水平感覚と繊細な文化

て、建築物自体も『感覚の波動』をとらえるものでなければいけなかったのです。その繊細な変化をとらえる感覚は、現在におけるデザインにも影響を及ぼしているのです」

古い芝居小屋は舞台が横に長く作られている。その伝統を受け継いで、現在の歌舞伎座も、欧米の劇場とは違って横に長い舞台を持っている。能舞台も橋掛かりを含めれば横に長く、水平感覚を持っている。そして歌舞伎も能も、古くは椅子ではなく、床や地べたに坐って見物するものだった。

「日本の室内のあり方は、決して強さを誇り堅持するようなものではありません。人間の深い思い、はかなさ、寂しさ、わびしさ、もろさ、うつろいやすさなどの無常観に対応する心の発見だったのです」
変化することを自然ととらえる日本人。一方西洋は、徹底した言語化を通じて、あらゆるものを固定

化していく文化だと内田氏は考える。日本人がはっきりと答えを示さず、「わかりません」とよく言うことは不思議でもなんでもない。

「だって、形而上学的にわけられないものは、この世にたくさん存在しますよね。茶室における路地、縁側などもわけられない世界です。繊細性や繊細性は、近代化によってもっとも失われたものではないでしょうが、それでもまだ日本人の心の中には繊細なものが残っていて、人の微妙な感情を読み取る力があります。繊細な色彩感覚などもそうですね。それは自然が繊細だから、色彩も繊細にならざるを得ない。地中海の強い光の中では、微妙な色の違いは飛んでしまいい、はっきりした色合いしか残らなくなりますが、日本人が持っている繊細性は、人間としての生き方

につながっていきます」

千利休の生き方は、繊細性、繊細性をきわめたものだったといえる。利休はわずか2畳という草庵で「侘び茶」を追求した。そこで使われる数々の道具や趣向は、一期一会の精神を象徴する、その茶事だけの取り合わせだった。

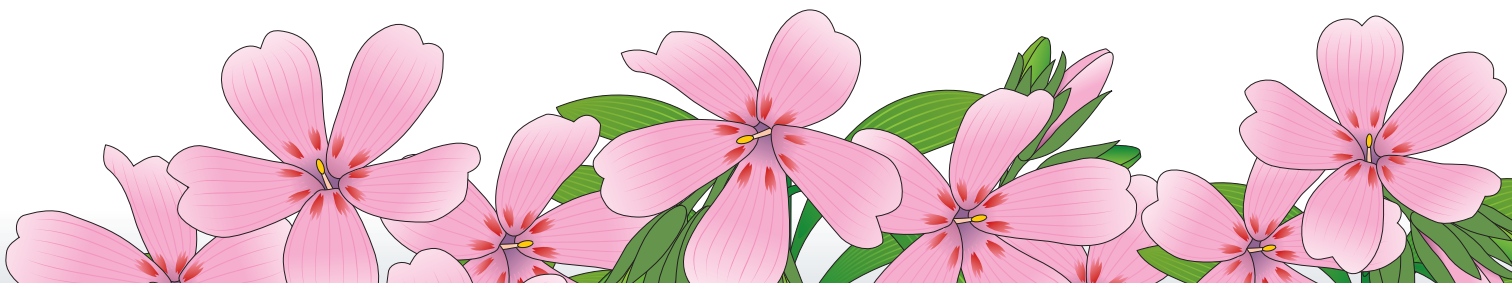
内田氏は茶の湯を学び始めても、長い間「一期一会」の意味をつかみかねていた。いろいろ語られてきたことはもちろん知っている。だが、自分の腹に落ちてこなかったのである。

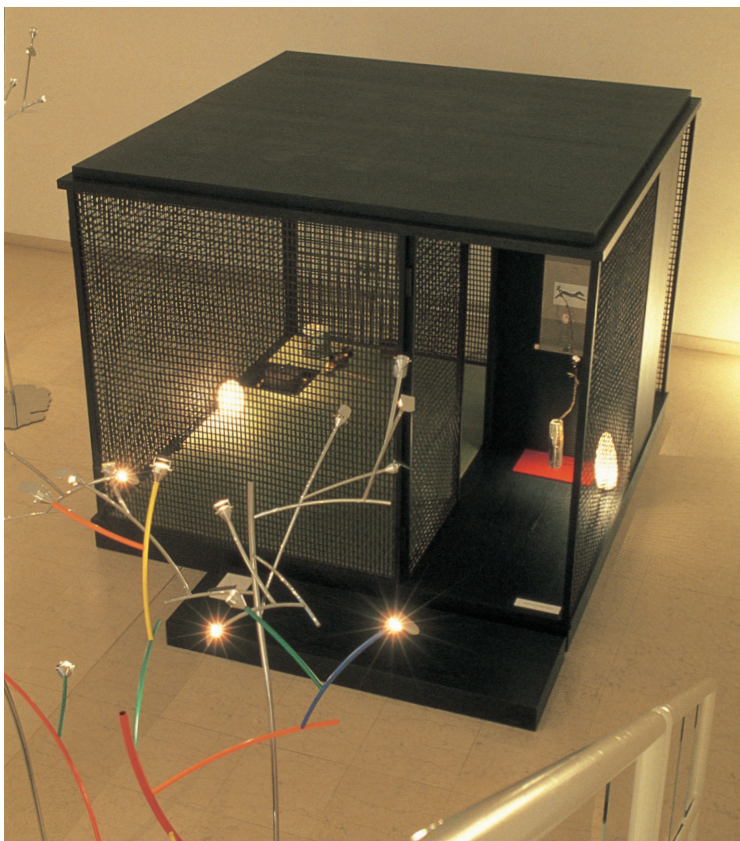
「結局は『今を堪能せよ』という意味なんじゃないかと思うようになりました。茶室をデザインするときも、最初のうちこそ決まりごとが多いと思っていましたが、試行錯誤するうちに、あるもの乗り越えてしまえば、その先は自由なのだと思いついたんです。そこで出会う人との精神の背景を作ればいいのだと、だんだんわかってきたといえますね。そういうものなら、茶室でなくてもこれまで作っていましたから」

内田氏がデザインした茶室の中には、運べるものもある。「受庵・行庵・想庵」「山居」などと名づけられた茶室は、海外でも高い評価を受けた。これらの茶室は、壁によって外部と隔てられているものの、自然の変化が中にもいてもわかるように作られている。実際、山に囲まれた河原に「受庵」を置いてみたことがある。川のせせらぎの音が聞こえ、川風が茶室を流れ、太陽光が透けて床に美しい影を作る。やがて日が



上田家伝来の由緒ある道具をしつらえた「山居」。写真：浅川 敏





ホテルのオープンイベントにお目見えた茶室「山居」。写真：浅川 敏

落ちれば、茶室に灯された明かりが外に漏れ、四角い光の箱が出現する。実に不思議な空間である。内田氏はほかの建物のときと同じく、入口のデザインにもっとも苦労したという。

「入口からは象徴性が飛び出してくるんです。それをどうやって消していくか。入る、出る、それぞれすごく重要な行為ですね。出ることが保証されているからこそ、安心して入れるわけです。利休が作った国宝の茶室『待庵』は、罫口に光が行かないように設計されています。閉じてしまったら光は見えない。茶室の中にホリゾン（照明によって背景を作り出す壁のこと）を作ってしまうような意図を感じます。あんなに小さな茶室なのに、そこに無限の空間が出現するのです」

内田氏の茶室は象徴性の高い、なんともないうで実はならない空間に思われる。こういう茶室を使って茶事をやれといわれたら、茶人たちはどれほど自分らしい趣向を考え抜くことになるのだろうか。区切られていながら、自然と交感する茶室。それはたしかに精神の背景である。

「広島にある上田宗箇流の現家元が、あるホテルのオープン記念する茶会を開くために、僕の『山居』という茶室を借りていかれたことがあります。そのとき家元は、『現代作家の道具を持ってきてこの茶室には合わない。悩んだあげく、上田家伝来の由緒ある道具を出してみたら、ぴたっと合いました』とおっしゃっていましたね。いっそ、黒田泰蔵さん（白磁の第一人者）みたいに形も新しいものならうまく行くんじゃないか。古い道具が合ったというのは、僕の空間が空（ウツ）だったからじゃない？ 茶事が終わったら空っぽになるばかりか、その場から消えてしまうんですからね」

空（ウツ）を現（ウツツ）に変え、再び空に戻る場所、茶室。そこに盛り込まれる趣向は、客をもてなす精神の背景となる。客は亭主の心をくみ取り、「和敬清寂」の境地を生み出すような心からの会話を樂しめばよい。デザインはそのための道具である。「現代のデザインは、ユニバーサル・デザインという言葉にも表れているように、いつでも、どこでも、誰にでも使えることが重視されています。しかし、すべてがユニバーサル・デザインで統一されたとしたら、そんなものは文化じゃない。この日、この一瞬だけのために蔵から出してくる道具があっただけ。茶の湯はまさにそうですね」

茶室を舞台に、一瞬だけの現（ウツツ）を出現させるもてなし。この伝統的であり、前衛的でもある文化の中に、企業がめざすべき新しいもてなしのあり方も隠されているのではないだろうか。

おもてなしの 源流

